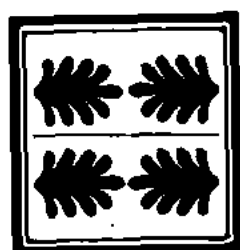


無名碑 (下)

曾野綾子





講談社文庫

無名碑(下)

曾野綾子

昭和53年1月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 廣濟堂印刷株式会社

印 刷 廣濟堂印刷株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Ayako Sono 1978

Printed in Japan

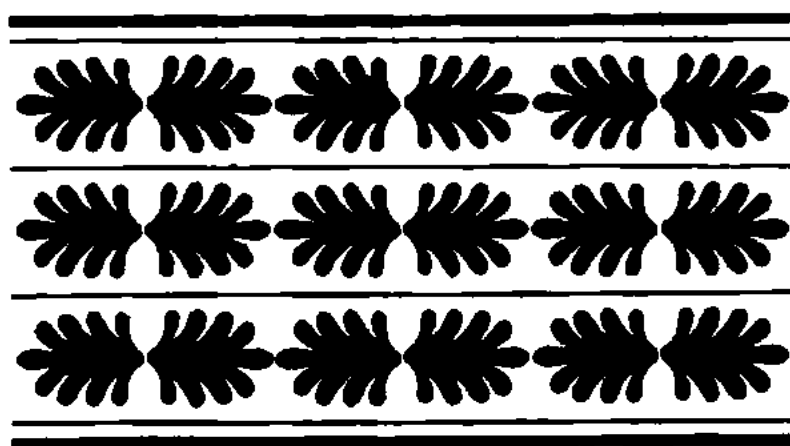
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

無名碑(下)

曾野綾子



講談社

目次

無名碑(下)

あとがき

解説

年譜

池上雅夫

五

三五二

三五五

三六五

無名碑 (下)

第二章

4

竜起は、金沢の徳永の義母と入れ代りに東京の病院に入ったが、義母が郷里へ帰る直前、病院の廊下を玄関迄送って出ると、老女は遠慮深そうに、竜起の顔色を見ながら言うのだった。

「容子が、金沢のお父さまのことお話しましたかしら」

「いいえ、まだ何も聞いていません」

「実は私のところへ、梨花の見舞に行こうか、というお申し出があつたんですよ」

徳永夫人は、他ならぬ娘の舅からの連絡だったので、容子に電話をかけると、今、こういう大切な時期に、病人を疲れさせるような余計な事はしてもらいたくない、と言つたのだった。

「昔からの経緯^{いきさつ}はどうあろうと、あなた方夫婦は、あまりと言え、仲が好すぎて、親も親類もどうでもいい、というところがありましたものね。今迄、一度も梨花を連れて金沢へ帰らないつていうことだつて、普通じゃありませんよ」

徳永夫人は、それを皮肉や当てこすりではなく、さらりと言つてのけた。

「容子の性格がいけないんです。あの子は、人に頼らないつもりかも知れませんが、優しさが無いのよ」

「僕は強情な女が好きなんです。眼をつり上げて歯をくいしばって頑張っているような容子が容子らしいと思うんです。それくらい強くないと、僕たちの生活もなり立たなかったかも知れません」

「あなたがそう言つて下されば問題ありませんけど」

「父には、それで何か言われましたか？」

「梨花がよくなったら、連れて金沢へ帰つて元気な顔をお見せします、と容子が言うものですか、そう申しあげておいたのよ」

「それで結構です。容子にしてみたら、父には怨みがあるでしょうし、その父に、体の弱い子を見せたくない、という気持は大いにあるだろうと思います」

容子に似て、容子よりもっと整つた美しい顔立ちの徳永夫人が、灰色がかつた薄藤色の一重の和服を着て、夕方七時を過ぎてようやく陽の落ちた夕暮の病院の門の方に消えて行くのを、竜起は見送つてから、病室の方に戻りかけた。

廊下の途中に花売りの売店がある。スイートピーや薔薇の花の奥に、眼鏡をかけた老人が、暗い洞穴のような表情で坐つていた。竜起ははっと足を停めた。老人は父に似ていた。父よりも痩せていて、それだけに一層、父のものはや目的を見失つた執念や老境の淋しさを一身に背負っているように見えた。竜起は歩調を落し、自分が老人を見つめていることを相手に気づかせないよう

にしながら、老人が花の蔭で、冷えたぼろぼろの飯粒を弁当箱から口に運びながら、ひとり夕食をとっている姿を見て、病室に帰った。

竜起は、何事も深く考えまい、としていた。夫婦は病院の許可を受けて、病室の三畳の畳の上に布団を敷いて泊りこんだが、竜起はわざとでなく、その生活をおもしろいと思った。三畳の畳には仕切りがなかったのも、自分の居場所に関する或る閉鎖的な落ちつきをもたらすものは何もなく、舞台の大道具で作った座敷の上に寝たらこんなではないかと思われるくらいだった。足許の方に高く梨花の鉄製のベッドがそびえており、竜起はそれを寝ながら城に見立てた。城に立てこもっている梨花はいいお姫さまで、これからそこに忍び込もうとしている竜起は悪漢だと言うので、梨花は容子がはらはらするほど、あるだけの夏布団や寝巻でベッドのまわりに城壁をめぐらし、最後に湯あがりタオルをかぶって悪ふざけの楽しさで輝いている眼だけを出して悪漢の竜起を偵察するふりをしてはしゃいだ。

病院は夜遅くまで物音に満ちていた。たとえそれが死にかかっている癌患者の呻き声であろうと、酸素のボンベを積んだ車を押す看護婦の足音であろうと、竜起はそれらの物音を容子のように恐怖の対象としてではなく、或る組織が、人間の生死から打算、はかない恋までを含めた、あらゆる活動の場の物音として聞くことができた。そのために現実には常に多忙で——ちようどよく構成された芝居が、快いタイミングで次から次へと新らしい筋の展開を見せるように——積極的な作業をしている気配に竜起は心がひき立てられるのを感じた。病院も現場も、そして恐らくは人生そのものも、観念の所産ではあり得ない筈だった。それらは現実には一歩一歩手を下して作っ

て行くものであり、それらが完成した時のことは遠い目標ではあっても、さし当りの目的ではなかった。

手術の前には、心臓カテーテルと、心臓造影法と、二つの大きな検査がある。竜起は手術までいられないことがわかったが、目的に近づいて行く道程を娘と共に歩けることは幸運だと感じていた。

翌日、回診の時、若い医師は採血したあとで、目顔で夫婦を外へ呼び出した。

「明日の検査はちよつと大変ですから、今日午後の熱次第によっては、取りやめますから」ということは、相当に危険な検査なんでしょうか」

竜起は尋ねた。

「いや、そういうこともありませんが、まあ千人に一人は、耐えられない人もいます」

「千人に一人なら、風邪をひいても死にますね」

竜起は確率を信じる性格だった。

「まあ、そういうことです」

竜起は医者が立ち去るのを、容子と共に見送った。今日も又、雨が窓の外いちようの銀杏に降り注いでいた。

「どうして、病院の窓からの眺めには、銀杏がつきものなのかな」

竜起はおどけた口調で言った。

「あなた、先生の手が震えてたのに気がつかなかった？」

容子は脅えたように言った。

「いや」

医者は煙草のヤニのためか、黄色く染った指をしていた。しかし、水で常に洗っているの、いつも湿りけを失わないような肌理きりのこまかいしつとりした手をしていて、竜起は自分の掌と見比べて職業上の強烈な違いを感じていたところだった。

「確かに震えていらっしやったわ」

「じゃあ、昨日飲みすぎたんだろう。気にすることはないよ。明日迄には宿酔うかつも醒めて、検査の時には震えもとまってるさ」

夫婦が中へ入ると梨花はベッドの上にきちんと仰向けに寝て二人が帰って来るのを待っていた。その端然とした姿勢の中に、竜起は清水と自分が初めて会った夜、気配で目を覚めていた立一郎が、やはりこんなふうに身動きもせず、大人たちの動静を体中耳にして聞いていたことを思いだした。瞬間、二人の子供たちを《姉弟だから》と思い、竜起はその考えの奇怪さを心の中におし隠した。

「先生、何て？」

梨花が尋ねた。

「熱があつたら、明日の手術やらないって」

容子が答えた。

「やらない訳にはいかないじゃないのねえ」

梨花は明瞭な澄んだ声で言った。

「ずうっとやらなくて済むんないけど、いつかやらなきゃいけないんなら、梨花早いほうが

いい」

「それはそうだな」

竜起は梨花の子供とも思えない論理的な調子におされていた。

その日は病室にさまざまな人が来た。容子が仲よくしている附添婦や少し離れた部屋に、やはり心臓の手術を受けた五歳の男の子がいて、その子が退院間近かなので遊びに来た。

「人間の体なんて簡単なもんだな」

竜起はベッドの上で他愛のないことを喋っている二人の子供たちを見比べながら容子に言った。

「穴の開いた所を塞いで、通すべき所を通せば、あんな顔色になる」

男の子はパジャマを着て、もぎたての果物の表皮のように、湿りけの具合も、乾き方も、色の鮮かさもすべてが健康な唇の色をしていた。午後の面会時間には、梨花の幼稚園の友達之母親二人が子供二人を連れて来た。女たちは、幾分竜起に気がねしているように見えたので、竜起は、その場の雰囲気を楽しむために、下の売店まで煙草を買いに出た。すると雨がやんで、溢れかえるような緑が窓の外を覆っていたので、竜起は階段の踊り場のよく見える所に立って、暫くの間、その心の安まる色の中で安心して立っていた。それから再び梨花がアイスクリームが好きなことを思いつき、客の分も含めて七つのアイスクリームを売店で袋に入れて貰うと、今度は急ぎ足で階段を駆け上った。すると、病室のドアのところ、眉根を寄せて、顔を固くこわばらせた容子が、まるで押し出すように、見舞客を帰そうとしているところに出会った。

「アイスクリームを買って来たんだけど」と竜起は妻に言った。すると客の母親の一人は「いい

え、あんまり長くお邪魔すると、検査前にお疲れになりますから」と恐怖に満ちた眼をして竜起を見返した。容子の眼が窓の外の青葉の色をうつして、緑色に燃えており、客の母親はその熱のない焰にうたれているように見えた。

「アイスクリームだけ食べて行って頂いたらどうかね」

すると容子は、

「あなた、今日は、梨花を安静にさせないといけませんから」

と厳しい口調で言い返した。

母親たちにそれぞれ挨拶をなさいと言われると、容子が早くも閉めかけている僅かなドアの隙き間から、子供たちは「さよなら」を交互にくり返して広々とした廊下を走って行った。

「何だって、あんなに、急に追いついたの？」

健康な子供たちにとって、病気や、病院の生活はまるでお芝居のようなものだったろうと思いつながら、竜起はまだ冷い興奮に震えているような妻の肩を抱いた。

「あの人たちが心ないと思わない？ あの人たち、自分たちの子供が健康な子供だから、それを見せびらかしに来て、そして梨花が病気なのを楽しんで帰るつもりだったのよ」

「なるほど」

竜起は黙って、妻を固いソファの上に坐らせ、自分はアイスクリームの紙袋を持ったまま病院の入口の見下せる窓際へ行って立った。

「そういう気持も、ないとは言えないな。他人の不幸で自分の幸福をはかる気持は、誰にもあるからね。しかし同時に、あの人たちは、梨花にも君にも、何かしてくれなかったんだよ。何がで

きるかは別としてね」

竜起は、容子が泣いているような気がして振り返ったが、容子は只、能面のような表情のまま、竜起や梨花の居場所を越えて、はるか遠い視点に釘づけになったように身じろぎもしなかった。

「君の、梨花を庇^{かば}う気持はわかる。あの人たちも心ないといえは心ないさ。しかし、今みたいに厳密な暮らし方をしていると、梨花がよくなった時、あの子は友達を失ってしまうよ」

「梨花は、友達なんて、初めからありません」

「どうして？」

「だって、今だって、あの子たちが梨花に何かいろいろ喋りかけたけど、梨花は一言だって……最後のさよならだって、言いやしなかったわ」

「それは、梨花が君の言う通り少し甘えてるか、それとも、何か口をききたくない別の理由があるからだろう。それは後で梨花に聞いてみなくちゃわからん」

梨花は、平然と、父親の言葉を、まるで自分の理解することのできない外国語で喋っているかのように涼しげに聞き流していた。病院の玄関からは、先刻の母子連れが出て来るのが見えた。母親たちは、言い合わせたように枯葉色のレインコートを着ていたが、一人はピンクもう一人は藤色の花模様の傘をさしていて、（雨はやんでいたが、木の下蔭は雪が多いのだろうと竜起は考えた）子供たちの交通安全用の黄色い傘と並んで、濡れた地面に生えた大輪の三色堇^{すみれ}のように見えた。竜起は母子連れが病院の門の外に消えるのを見送ってから、笑顔を取り戻して妻と子の方をふり返った。

「せっかく買って来たんだ。アイスクリームを食べよう」

容子は石のような表情で袋に手をつけなかった。父と娘は向い合って、容子には見えない角度で時々微笑し合いながら、木の小さな籠で甘いアイスクリームを黙々と口に運び続けた。

翌朝、梨花をストレッチャーに乗せて送り出す時、竜起は昨夜、紙袋の中で無残に溶けて行つたアイスクリームの感覚を思い出し、梨花は、病苦の他にこの世の悲しみまでも胸の中に抱きこんでいるのだと考えながら、「梨花、お父さんもお母さんもお部屋の入口で待ってるからね」と言う、鎮静剤をうたれて、眠っているように見えた梨花は、睫毛にかかるほど伸びかけた艶やかな前髪の端正な寝顔をことりと動かして、はつきりと頷いて見せた。

竜起は娘の車につきそって歩いた。暗い病院の廊下のところどころに、穴があつて、そこで車はがたんがたんとして揺れる。すると梨花の顎の先が、小さく震えた。

車はエレベーターの箱に乗せられて一階まで下り薬臭い廊下を再び移動して行った。古めかしいフラッシュ・ドアの向うに梨花が入って行く時、容子は声をかけそうにしたが、竜起はその手を取って引き停めた。

「ここへ坐ろう」

竜起は白いブラウスに灰色のスカートをはいた容子を廊下に置かれている古い長椅子に坐らせた。「ここに坐つていよう。ここなら、気配がよくわかるからね」竜起は時計を見た。午前十時十分前だった。

「梨花は半分、眠っているのかも知れないな」